

『教育の場で、なぜ、コミュニケーションがうまく
いかないのか : 教育コミュニケーション入門』 桑
原広治 著

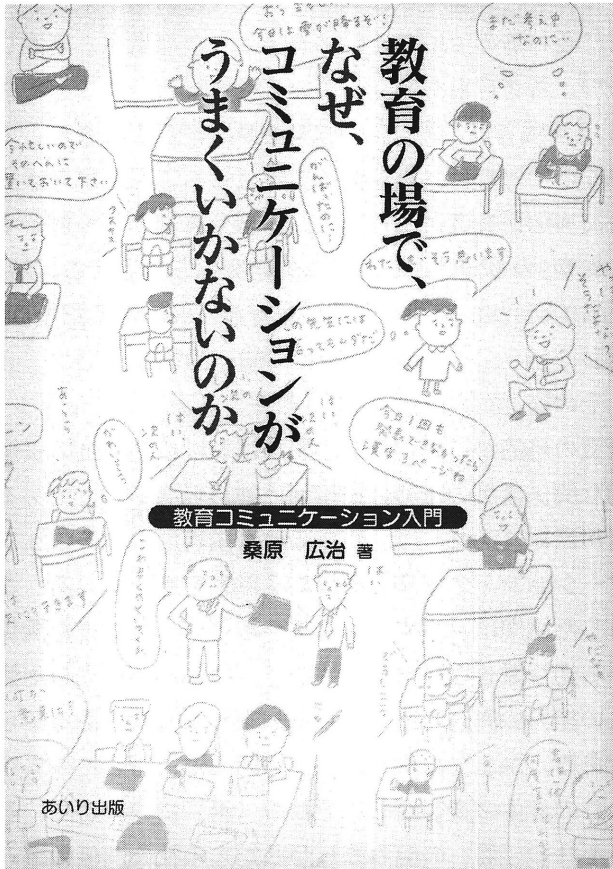
添田, 祥史
北海道教育大学

<https://doi.org/10.15017/19981>

出版情報 : 生活体験学習研究. 9, pp.51-52, 2009-01. 日本生活体験学習学会
バージョン :
権利関係 :

『教育の場で、なぜ、コミュニケーションがうまく いかないのか-教育コミュニケーション入門-』

桑原 広治 著



今日の複雑化し高度化した社会は、教師に幅広い教養と高い専門的知見を要請している。佐藤学 [1996] は、D.ショーンの議論を援用し、教科内容と教育原理と教育心理を中心に規定されてきた「技術的熟達者」としての「教職の専門性」からの転換を迫る。これからは、「反省的实践家」をモデルとして、教職の専門性と教師像は再定義されていくべきだという。

著者である桑原氏は、まさにこの「反省的实践家としての教師」を体現する人物である。現役小学校教頭として、日々の激務のなかで自らの言動に対して「行為の中の省察」を繰り返す。他方、著者は、講演会や研修等を通じて、自らの反省的实践で得た知見を後輩の育成に活用している。著者の圧巻は、こうした省察のために、日本生活体験学習学会、日本生涯教育学会、

日本教育経営学会に入会する等、自身の実践を理論的に整理するためにあらゆる尽力を惜しまない点である。

本書の具体的な紹介に入る前に、確認しておきたいことがある。なぜ、今、コミュニケーションなのかという点である。つまり、反省的实践家としての著者の嗅覚は、現場の何に反応したのだろうか。

一つには、教師と子どもとの関係の持ち方に対してである。教師というだけで、子どもとの関係規定が自動的に用意されていた時代は終わった。これからの教師は、一人の人間として子どもと向き合い関係を築いていく力量が問われてきている。

子どもの感情や立場を無視した叱咤激励、一方的な話し方、そうした何気ない日常の一コマコマが時に子どもを傷付けていたのではないか。「教師の言葉は重い」。だからこそ、教師たる者は、子どもとの接し方に細心の注意が必要なのではないかと著者は自らを問う。

二つには、教師と保護者との関係の持ち方に対してである。昨今、学校への保護者からの理不尽とも受け止められる要求が話題になっている。これからの教師は、こうした保護者の要求行動に折り合いをみつけながら、かつ、こうした保護者との関係を共同のパートナーへと再構築していく力量が不可欠となる。

著者は、ある保護者に「先生は、会えば学校や児童生徒の話しかしませんね」と指摘されたことが忘れられないという。時候の挨拶代わりに子どもの話題をするレベルで終わらずに、その子の夢や課題について保護者ときちんと向き合うべきだと筆者は自らを正す。

三つには、教師と地域との関係の持ち方に対してである。今後、ますます、地域と学校との接点づくりが大きな課題となるなかで、教師には、学校内外の多様な教育資源をコーディネートしていく力量が問われてくる。それと同時に、教師には、地域住民に対して「わかる」言葉で、学校の教育目標や連携事業の意義について説明を求められる機会が増えてくる。著者は自らの学級懇談会や地域の懇談会での態度を自省し、「伝えた」と「伝わったかどうか」は違うということを最近になって意識するようになったという。

このようにみていくと、本書は、現場教師に対して、教育研究者に対して、つまりは教育に関わるすべての人に有益な情報を与えてくれるものであるといえる。家庭・学校・地域の連携が大きく問われているなかで、

その関係再構築の鍵として、筆者はコミュニケーションに着目したのだろう。

ここに、実用的でありながら現場からの警鐘をあわせもつという、単なるコミュニケーション・スキルについてのハウトゥ本の類とは一線を画する本書独自の位置づけを確認できる。本書は、20数年間の教職経験の中で積み重ねてきた実践知を伝えたい、伝えなければならないという衝動から生まれたものであるといえる。本書は次のように構成されている。

- 第1章 教育コミュニケーション能力不足の実態
- 第2章 教育コミュニケーションの問題点
- 第3章 話し方上達の技術
- 第4章 話しことばと敬語、態度、マナー
- 第5章 コミュニケーションと発音・発声
- 第6章 話し方の実際 それぞれの場における応用
- 第7章 話し上手は聞き上手
- 第8章 集団の場でのコミュニケーション
- 第9章 コミュニケーション力を高めるリーダーの役割

本書の特徴として第一に、読みやすさがあげられる。著者は、教師は「わかるように話す」専門家であるべきだと主張する。本書の各章では、そうした「わかるように話す」ためのヒントや知識や技法が手順よく説明されているが、その文体、構成そのものが読者とのコミュニケーションを意識したものとなっている。

文体は「ですます調」でやわらかく、イラストレーターのミヤタチカのポップな挿絵とも調和して、読者は気構えすることなく読み進めることができるだろう。

第二に、豊富な実例が関連分野の知見を援用しつつ、丁寧に整理されている点である。一読すれば、著者の読書量は相当のものであることは明らかである。その中から、長年の現場経験からみて共有したい個所が巧みに引用されている。読者は本書一冊で相当の知識が身に付くだろう。ブックガイドとしても活用できる。

さらに、本書は、今日の学校現場の実情に沿った細かい情報も網羅している。若手からベテランまでと幅広い層の教師にとって、明日からすぐ使えるヒントがたくさん詰まった一冊である。

ところで、本書の副題は、「教育コミュニケーション入門」とある。そのエッセンスや用法は本文内に散りばめられてはいるものの、「教育コミュニケーション」

の明確な定義はなされていない。

しかし、この点は、本書の価値を低めるものではない。実践的な視点やヒントを得るという意味では、本書は十分に「教育コミュニケーション」について論じている。むしろ、この点は今後の研究的な問題提起として受け止められるべきだといえる。

ただし、ここでの含意は、こうした探究作業を研究者に委ねるのではなく、アカデミックな世界と協働しつつ、著者自らも関与していくべきだということである。「実践者は、研究者の成果を単に消費する者として働くのではない。実践者は実践にもちこんだ思考様式を反省的研究者に明らかにし、自分自身の『行為の中の省察』の手助けとして反省的研究へと接近する。(略) 反省的研究は、実践者の継続教育の一部になるだろう」(D. ショーン [1983=2001: 203-204])。

その際、留意すべき点は、「教育コミュニケーション」研究の目的が、単に教育の現場における他者との表層的な関係構築のための技術論に終わらないことである。岩川直樹 [2008] は、昨今の教育現場におけるコミュニケーション・スキルの流行に危機感を抱いている。こうした風潮は、本来、関わりや場といった生きた関係から切り離せないはずの問題が、関係から孤立した個人の能力の問題に還元されてしまうおそれがあるからである。コミュニケーションの問題は、むしろ一人ひとりの身体の変容がそれぞれの「場」につながり、それぞれの「場」の編み直しが私たちの社会関係の編み直しにつらなるような、教育実践のあり方そのものを探求することに見定めるべきだと岩川は主張する。

「これからも命が続く限り、子どもたちの『生きる力』に何が必要なのかの研鑽を積みながら2冊目、3冊目と執筆活動を続けていきたい」(本書あとがき) という著者の今後の活躍からますます目が離せない。

[あいり出版、2007年、2500円+税]

(北海道教育大学・釧路校 添田 祥史)

【参照文献】

- ・佐藤学 1996『教育方法学』岩波書店
- ・D. ショーン 1983=2001 (佐藤学・秋田喜代美訳) 『専門家の知恵』ゆみる出版
- ・岩川直樹 2008「コミュニケーションと教育」『教育』2008年7月号、国土社